

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 30 年 4 月 18 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	佐藤 侑太郎

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、京都、京都市動物園
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
シンポジウムへの参加 (“What is Unique and What is Typical of Human Mind ?”)・京都市動物園での実験・「野生動物学のすすめ」ブース出展
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 30 年 3 月 29 日～平成 30 年 4 月 16 日 (19 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都市動物園 生き物・学び・研究センター：田中正之 博士、山梨裕美 博士、櫻庭陽子 博士
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
目的 本出張は、(1) 国際シンポジウム (“What is Unique and What is Typical of Human Mind ?”) への参加、(2) 京都市動物園におけるチンパンジーの認知実験の実施、(3) 京都市動物園におけるイベント「野生動物学のすすめ」のブース出展を目的とする。
行程 3 月 29 日 (木)：移動 30 日 (金)：シンポジウム参加 31 日 (土) - 4 月 12 日 (木)：動物園にて実験など 14 日 (土)・15 日 (日)：「野生動物学のすすめ」参加 16 日 (月)：移動
所感 3 月 30 日 (金) におこなわれたシンポジウム “What is Unique and What is Typical of Human Mind ?” では、主に比較認知科学・発達心理学の分野で活躍する研究者の講演を聞いた。それぞれの研究者の最新の成果を直接聞くことができ、大変勉強になった。また、プレゼンテーションは大変わかりやすく、内容だけでなくプレゼンテーションの技法にも感銘を受けた。 京都市動物園にて、チンパンジーを対象としたアイ・トラッキング実験を始める機会をいただいた。現在熊本サンクチュアリでお世話になっている狩野特定准教授の下、実験環境の整備から携わった。アイ・トラッキング実験では、チンパンジーにジュースを与えながら、モニターを見てもらい、その視線をモニター下部に設置したアイトラッカーで計測する (Fig. 1)。チンパンジーがチューブから落ち着いてジュースを飲めるか、モニターに注意を向けてくれるか、一人が実験に参加しているときに他のチンパンジーが邪魔をしないうか、といった課題がある。これらの課

題を解決すべく、様々な工夫を施した (Fig. 2)。チンパンジーだけでなく、実験者側もまだ慣れておらず (Fig. 3)、安定して実験をおこなうには少し時間がかかると思われる。しかし、練習を重ねることで十分改善することができると感じられた。大型類人猿研究では、参加者数が少なくなってしまうことが多い。そのため、このような施設間の連携は極めて重要である。

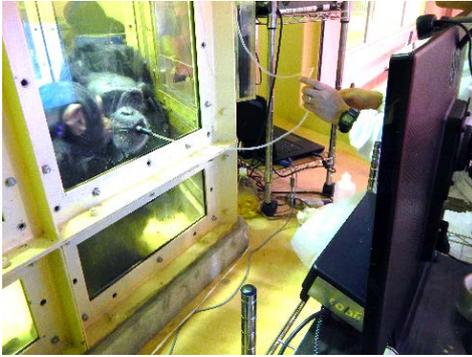


Figure 1. チンパンジーのアイ・トラッキング実験風景。実験参加中のチンパンジー（コイコ）の横から、息子（ニイニ）がジュースを狙っている。



Figure 2. 実験に参加していないチンパンジーもジュースが飲めるように器具を設置した。他のチンパンジーが実験参加者の邪魔をしないようにするためである。

「野生動物学のすすめ」では、WRC を紹介するブースを出展した (Fig. 4)。ブースでは、WRC の学生の活動を紹介する冊子の配布や、粘土で動物の体をつくる体験コーナーを設けた (Fig. 5)。動物の特徴的な身体部位 (例：ゾウの鼻・キリンの角) を隠した台紙の上に、粘土でその身体部位を作ってもらった。このような体験を通じて、動物の体についてより深く知ってもらうことを目指した。粘土を使って実際に手を動かしてもらえるようにしたことで、子どもたちに楽しんでもらったのではないかと思う。

反省点として、今回は屋外での出展であったため、風が吹いたときに物が飛ばされる事態が多発した。そのため、他の体験（チンパンジー顔写真の神経衰弱ゲーム）はあまりできなかった。重しやテープ、マグネットなどを用いて屋外にも対応できるよう、事前に配慮すべきであった。



Figure 3. 部屋の片隅に座るオスのジェームス。なかなか実験に参加しようとしな。モニターにメスのチンパンジーの写真を表示すると、ジュースは飲まずに写真だけ見に来た。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



Figure 4. ブースの様子。



Figure 5. 粘土コーナーの様子。キリンの角やゾウの鼻など、知っているように思えるが、実際に手を動かして形を作ってみると案外難しい。

6. その他（特記事項など）

実験・イベントを通してお世話になりました、京都市動物園のみなさまに感謝いたします。中でも生き物・学び・研究センターの田中正之 博士、山梨裕美 博士、櫻庭陽子 博士、チンパンジー飼育担当のみなさまに多大なご協力をいただきました。深謝いたします。高等研究院 狩野文浩 特定准教授には、実験にあたってご指導いただきました。御礼申し上げます。イベント当日にお世話になった京都大学野生動物研究センターの岡桃子氏、楊木萌氏、越智咲穂氏、前田玉青氏に感謝申し上げます。